



一栄谷の 異見 私見

世界を向こうに回してミサイル発射を繰り返して核実験を強行してきた北朝鮮が一転して歩み寄りをみせ、非核化を前提に米朝会談が実現したことは驚きであった。北朝鮮が本気で核廃絶をしようとしていると真に受けることは難しく、また中国を後ろ盾にしてのアメリカどのかげひきも綱渡りの感があり、先行きについての楽観は許されない。しかしながら朝鮮半島ひいては世界の平和に一縷の希望をもたらしつつあることは歓迎したい。

この動きと相前後して驚かされたのがマハティールの復活である。現在22歳、マレーシア首相を退任したのが2003年であるから、15年ぶりの首相復帰となる。ナジブ前首相の政府ネファンドの資金不正流用疑惑をはじめとする汚職体質からの決別を掲げて出馬したものである。消費増税やガソリン料金の公的補助復活を公約に掲げていたが、早々に打ち出したのが中国が「一帯一路」構想の主要事業として受注攻勢をかけていたラアラルンブルとシンガポールとを結ぶ高速鉄道計画の中止である。これは

これまでの親中国政策からの転換、脱中国依存を宣言したものと見る向きも多い。

そのマハティールはTPPの見直しの必要牲についても言及している。マレーシアは参加国が国の一つであるが、あらためて「国の経済発展段階の違いを考慮することが重要

マハティールとトランプ

だ」と発言しており、GDPが少ないマレーシアに優遇措置などの配慮を求める姿勢を打ち出している。TPPは昨年1月に合意したものの、その見直しの可能性が浮上してきたものであり、今後の行方が注目される。

こうしたマハティールの言動に対して、TPPの発効がずれ込みかねないとの懸念から「またか」との反応とともに、アメリカ・

ファーストを掲げて自国の社会・経済の建直しを最優先するトランプと相似すると見る向きもある。そのトランプは中国を最大のターゲットにしての貿易戦争を繰り広げるとともに、先のカナダでのG7サミットでは、貿易相手国を激しく非難するだけでなく、首脳宣言の受け入れをも拒否した。そこには相対的に国力を低下させるアメリカのあがきとともに、中国との覇権争いには何としても負けるわけにはいかないとする執念を見取ることができる。マハティールとトランプはカリスムとしての共通点があることは確かだが、大國主義を振り回すトランプとマハティールを同列に置いて論ずることとは的外れであると言わざるを得ない。

これらの動きを踏まえて丹心なことは、世界、アジアにおける日本の立ち位置が難しくなってきているということである。韓国と北朝鮮の対立があつて一歩離れたところから中国、ロシアと向かい合つてきた日本であるが、中国、ロシアと直接向き合わざるを得ない方向に情勢は流れつつある。言い換えればアメリカ権威だけではすまない多極情勢へとすすんでいるようにも見える。その意味では脱中国依存を明確にするとともにTPPのあり方そのものに疑念を孕するマハティールの姿勢と言動には考えさせられるところが多い。(農的社会学サイエンス研究所代表)